

平和がもたらす豊かな本棚

西内 ミナミ

わたしの記憶の底から消えない夏休みの光景は、夕日に照らされて、小さな波がしらがきらきらときらめく海とともにあって、改めて数えてみると、もう半世紀以上の時がながれているのです。

敵機来襲などから免れた瀬戸内の小さな島「直島」で、父の仕事の関係で小学校時代のほとんどを過ごしました。夕方までを海辺で過ごし、真っ黒に日焼けして帰る家は、質素な自宅の家で、家具といったって丸いちゃぶ台と、子どもの目と同じほどの高さだった父の本棚くらい。その本棚に並んでいるのは毎日見ているので、すっかり覚えてしまった「斎藤茂吉」とか、「アララギ」とか、朔太郎の「青猫」という函入りの本の背表紙。いっぽう母の本といえば「羽仁もと子著作集」。毎月購読していたのは「婦人之友」。それが我が家庭環境でした。そう、母は父と出会う前は、京都の女学校をでた後（友の会）の「生活学校」で洋裁や料理を身に付けて、その実践に熱心な婦人の一人でしたから、初めて授かった子であるわたしの子育ては、着衣に始まり、クッキーなどおやつまでも、すべては手作り、たとえ木枯らし吹く冬の日であろうとも、裸にして縁側で日光浴をさせるという方式で、母はクリスマスではなかったとしても、いわば羽仁もと子教（？）のもとに、子育てがされていたのでした。後年、婦人之友社が子女の情操をはぐくむために「子供之友」という素晴らしい良質な絵雑誌を発行していたことを知ることになるのですが、わたしがそれを与えられることがなかったのは、惜しいことに日本が軍国主義に傾いていく中、国家総動員法のもと日本出版界の統制により廃刊を余儀なくされていた時期にあたっていたというわけでした。

1945年、8月に日本は敗戦。それはわたしが6歳で国民学校に上がった夏休みのことでした。

「今日は、大人は大事な放送を聞くから」と、子どもらは外で遊んでいるようにと出され、それが玉音放送でした。空襲でやられなかったとはいえ、その後の食糧難は日本中おなじこと、私たちは食べ物に飢えていましたが、電気の傘を風呂敷で覆わなくてよく、明るい灯火が許されるようになった夜には、本読書というものにも飢えていたのではないのでしょうか。

そして翌年には焼土の中から早くも子ども向け雑誌が創刊、発行されはじめ、出張で都会に出る機会に父は目ざとくみつけて、わたしに買い与えてくれたのでした。年が明けるとに相次いで粗末な紙ながら数をまして出版され始めたアンデルセンやグリムの話、小川未明の童話、家にはわたしの本もまた居場所を作っていくのでした。中学年になると、学校では先生が島でも買えるようになった名作ダイジェストものの「ああ無情」「フランダーズの犬」などを時間割を無視してまで読み聞かせてくれる…熱狂した子らは、たがいに本を持ち寄り、たちまちに学級文庫ができていく…。

わたしの本を初めて手にした、あの頃から70年！ その本年は、子どもの本の普及と発展においての「節目」が重なる年を迎えています。春には「こぐま社」40周年のイベントが銀座教文館であり、続いて偕成社が創立80周年を祝い、さらには「子供之友」を受け継ぎたいとの想いで発刊された福音館書店の月刊保育絵本「こどものとも」は創刊60周年を迎えて、記念の行事が盛りだくさんです。それらいくつかの草創は、敬虔なキリスト教信者の志によって成されました。

一口に戦後70年というけれど、その間の日本の子どもの本の歴史は絶えることなく素晴らしい軌道を描いてきて、それはひとえにこの国に「平和」が続いたからの賜物ではないでしょうか。

（子どもの本作家・日本児童文学者協会会員）